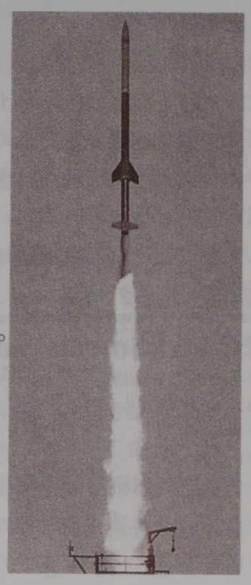
日本で観測用ロケットを売込み ブリストル社が丸紅と提携

マニトバ州ウィニペグにあるブリストル・エアロスペース社はこのほど丸紅㈱と代理店契約を結び、日本の宇宙科学観測や、宇宙での微小重力を利用した材料実験プログラム向けに、観測用ロケット「ブラック・ブラント」の売込みを開始した。

ブラック・ブラント・ロケットは、NASA(米航空宇宙局)をはじめ、各国の航空宇宙機関で利用され、これまで微小重力実験やオーロラ研究、深宇宙観測などを目的に、1962年以来700本以上の打ち上げ実績をもっている。最近では、テキサス、メーザーという ヨーロッパの2つの微小重力実験プログラムでも使用された。



米国ニューメキシコのホワイト・サンズ射場から打上げられるBB8。NASAの材料研究計画の一環として微小重力実験のペイロードを積んでいる。

ブラック・ブラント・ロケットには、開発中の4段・高性能ロケット「BB 12」を含む直径44センチ型の観測用ロケット4種がある。ブラック・ブラント・ロケットは重さ70kgのものを150kmから1,500km以上の上空に打ち上げることができ、最高18分の観測を可能にする。

ブリストル社のスペース・システム・グループは、ロケット本体のほか、打ち上げに必要なさまざまな支援システムやサービスを提供している。例えば打ち上げ装置は普通の固定式発射台だけでなく可動式発射台も用意しているほか、ポータブル・ペイロード交換装置や予備通信モニター・システムなども自社製造し、実験の可能性調査や実験結果の分析なども行なっている。

モントリオール港を拡張 貨物扱い量の増大に対応

カナダ最大のコンテナ港であり、北米東海岸で2番目に重要な港として知られるモントリオール港(**写真**)は、ここ10年間、コンテナ取扱い量が年平均13.1%の割合で増えてきた。

今後、伸び率は漸減するものの、それでも同港のコンテナ取扱い量は西暦2010年までに昨年の550万トンから1,300万トンに達し、貨物取扱い総量は3,500万トンを超えるものと予測されている。

そこでモントリオール港公団では、こうした需要増に対応するため、「ホライズン2010」という今後20年にわたる開発計画のもとに、モントリオール川南岸に150ヘクタールの土地を購入して面積を現在の2倍に拡大し、ターミナル施設を拡張、改善することになった。

公団では、1992年までに1億2,000万ドルを投じて、コンテナ・ターミナルを拡張し、港内鉄道を延長し、穀物倉庫を拡充する計画。これにより、モントリオール港のコンテナ処理場は現在の55ヘクタールから2010年までにおよそ180ヘクタールの大きさになる。

新鮮な北米経済の切り口

カルガリー大学主催 日本人管理職向けビジネス・セミナー

第1回受講生　田口堯雄

カルガリー大学インターナショナル・センターは、同大学経営学部およびバンフ・スクール・オブ・マネジメントの共催を得て、昨年から日本人管理職を対象としたビジネス・セミナーを開始した。

8月31日に歓迎会を兼ねたオリエンテーションがあり、翌9月1日からセミナーがスタートし、9月20日のお別れ会兼同窓会発足パーティで終了するまでの3週間で、北米に進出を図る日本企業の管理者に焦点をあてたコースが実施された。

ケーススタディと講義を組み合わせた興味ある内容のコースに参加したのは、日本人受講者7名とコーディネーターとしてアルバータ州政府東京事務所の田中マサ子さん。まず最初に2週間をカルガリー大学で受講し、次に世界最大規模を誇るエドモントン・ウエスト・ショッピングモールの見学と実地学習、バンフ・センターで11名のカナダ人ビジネスマン受講者を加え、カルガリー大学でのと同様な構成のコースで1週間学んだ。

バイリンガル、バイカルチュラルな広い視点をもつカナダ人からみた北米経済の切り口が私にとって非常に新鮮であり、大きな収穫であった。またセミナーの講師、スタッフ全員の熱意にあふれた取り組みもあって、言葉、文化の違いをこえて、セミナー時間外にも互いの交流が盛んに行なわれた楽しい3週間であった。

第3週のカナダ人エグゼクティブたちとの合同コースでは、日加間のホットなディスカッション、課外活動での親善を通じて貴重な情報交換を愉しんだ。

カルガリー、バンフともにすばらしい自然の恵みがあり、課外活動、フィジカル・フィットネスをすばらしいものにしてくれた。特筆すべきは、カルガリー・コースの

早朝トレーニングである。そこでは、名トレーナーのドクター・ジョージ・キニーアが指導するフィジカル・フィットネス・プログラムが組まれており、冬期オリンピック用に整備された設備をフルに使って、ドクター・キニーアが受講生全員にフィジカル・フィットネスの理論を講義しながら、柔軟体操と軽いジョギングを柱とした運動で心地よい汗をかかせてくれた。おかげで毎日良い体調でその日のプログラムに没頭することができた。

この企画がこれからも成功裡に続行し、多くの同窓生を生み出し、日加親善に役立つと同時に、受講生の中から北米で活躍するエグゼクティブが多数生まれることを期待する。　(セイコー電子工業勤務)